

令和5年度 卒業式 式辞(R6.3.14)

思い出深い校舎から、東に仰ぎ見る名峰立山。「富山県民の心の拠り所」に相応しい、純白で端正なその姿を、少しずつ春の装いへと替えようとしています。この春の息吹を感じる佳き日、第77回卒業式を挙げるにあたり、立山町教育委員会教育長様、雄山中学校PTA副会長様を始めとする来賓の皆様、そして保護者の皆様のご臨席を賜り、高い所からではありますが、心よりお礼申し上げます。

卒業生の皆さん ご卒業おめでとうございます。

今ほど皆さんは、母校を巣立つに相応しい立派な態度で卒業証書を受け取ってくれました。僅か一年間ではありましたが、毎朝「おはようございます。」と挨拶を交わした皆さんの元気な姿が今日と重なり、感慨深い思いに浸っています。

ところで、皆さんが本校で過ごした三年間を表現すると、いったいどう表せばいいのでしょうか。私は「コロナ禍から With コロナへ」という表現が適切ではないかと考えています。長く我慢のコロナ禍を乗り越え、今年度の早い時期からは、以前のような生活をだいぶ取り戻しました。修学旅行や体育大会、そして合唱コンクール、これら「心・技・体」を育てる行事を経験できたことは、皆さんのこれからの大きな良い影響を与えてくれることでしょう。リーダーシップ・思いやり・工夫・達成感等々。行事を通して身に付いたことは多かったはずで。

ここで、本校を巣立ち、新しい進路に進む皆さんへ、大切にしてほしい事を2つ伝えます。

1つは、「自分の五感で体験すること」です。近年のネット社会の発達で、行きたい所・知りたいことの情報は容易に手にできます。時間や空間を飛び越えるインターネットの世界は本当に便利なものです。しかし、そういう時代だからこそ敢えて伝えたい、「それは本当にあなたの体験ですか?」。ネット上の画像・動画そして文章には、必ず作り手の意図が含まれています。見せたいもの・主張したいことが強調され、それ以外は切り取られています。「百聞は一見にしかず」の言葉通り、自ら足を運び自分の目で見たもの・体験したことこそ「本物」です。全ては無理ですが、できるだけ「本物」を意識することで学び取れることも多くなり、何より「本物」には必ず感動が伴ってくると思います。

もう1つは、義務教育を終えるこの大きな節目に、いただいた「恩」を振り返ってみる事です。励ましてくれた友の友情、導いてくれた恩師の優しさ、そして何と言っても、この世に生を受けてから今まで、支え続けてくれた家族・親の愛。皆さんは分かっているはずで。でも、素直に伝えられない自分がいます。「親思う心に勝る親心」とは、幕末の思想家・吉田松陰の言葉ですが、親から受けた「恩」の全てを返すことはできません。しかし、この大きな節目にこそ、「ありがとう」と伝えてみましょう。親というものは、たった五文字のその言葉で報われるのです。そしていつ日にか、自分が預かった「恩」は、後の人に引き継いでください。自分がしてもらったように。

さて、保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。今日まで、

温かく見守り、手塩にかけて育ててこられたお子様が、卒業という喜びの日を迎えられましたことに、感慨もひとしおのことと存じます。同時に、これまで3か年にわたり、本校への温かいご理解、ご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

最後に、卒業生の皆さんの、さらなる成長と活躍を心からお祈りして、式辞といたします。

令和6年3月14日 校長 杉本 和博